郷土室だより

第32号
昭和56年6月15日
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電話 543－9025

切絵図考証一九

安藤菊二

○南八丁堀（続き）

江戸の全盛期、元禄時代の到来を目前に控えた、貞享四年（一六八七）刊行の地誌『江戸砂子』を見ると、「舟作并穴蔵大工」の多い町として「南八丁堀、小網町、うなぎ堀、銀町土手」を記したほかは、

座敷独狂言　南八丁堀一丁目　道具屋九右衛門
表具師　南八丁堀　辻　養竹
絵繕師　南八丁堀　辻　養作

などを記すだけで、あまり著名な商人の住んでいたようすは見えない。

○釣船神社

幕末から明治大正にかけて、南八丁堀一丁目には、釣船神社という社があって疫病除けの護符を配って、多くの崇敬者を集めていた。この社の縁起は『新撰東京名所図会』に、いかがわしいけれども、記しておくといって、ながながとその由来を語っている。

医学の知識が普及せず、なにごとも神頼みの世であったから、この社もずいぶん流行って、明治一二年七月二四日付の『東京曙新聞』には、

この頃、京都市中で、コレラ除けの呪に、戸毎に「東京府下第一大区十八小区内、八丁堀釣船清兵衛と書いた名札を張ること流行

という記事を載せているほどだし、先に一言した『新撰東京名所図会』にも、

当社の社殿は、明治十八年五月落成せしものにて、毎月二十四日を祭日とし、大祭を例年五月二十三、四、五の三日間執行せり。当日は遠近より群集する老若男女すこぶる夥多しく雑沓するといふ。

と書いている。

この社で出した護符について、山中共古翁の『共古随筆』に、次のような考説がある。

（六十九）釣舟清次

『江戸神仏立願一覧』といふ一枚ずりに南八丁堀一丁目に駿河屋といふ船宿あり。毎年五月廿四日施しに出す守札書の手跡にて、釣舟清次とかきし名札なり。昔此の家に厄神を泊め置たる其の礼に此の名ある所へは厄神入ることなしと記せり。又『江戸歳事記』にも同様の記事ありて遠近未明より群集し、此の札を受くとせり。古く出せしものを見るに厄神大権現と紅を以て書し、寛政二年五月廿四日釣舟清次と墨書してあり。此の釣舟清次の書せし札は、明に釣舟清次と読るれど、近頃出す札は一種の花押の如く読難く書せり。

右に出せる守札の古きものには、上に厄神と朱印にて記せり。現今のものも初めには須佐之男命と朱印にて記したりしが、其の後釣舟神社と朱印にて押せるを出せり。此の守札の起りは、厄神一夜の宿りの恩報に、清次の名前ある家へは疾病入らぬと約束せしによるを、今は厄神の方よりいへば反対の神なる須佐之男命として、釣舟神社などと名をつけ、府下のみならず、近国にも講中など出来て守札の数千枚を出す様になりしは如何に迷信流行の世とはいへ、馬鹿々々敷きことゞもなり。

この社が震災後消滅したのも当然の成行きと言ってよいであろう。

なお、近江屋版、築地鉄砲洲辺絵図には、南八丁堀三丁目の河岸地に「御神石地蔵」と刻してあるが、この地蔵様について語るものは見当らない。

第23　本湊町

八丁堀右岸に沿って東西に伸びる南八丁堀五丁目の尽るあたりから、ほとんど直角に南へ折れ曲る本湊町は、埋立頭初から町の脊後の武家屋敷の防波堤的役割を荷負うていたであろう。

この地は慶長の大理立工事以後、それに引続き行われた埋立によって、明暦三年以前にすでに埋立てを終っていたことは既述のごとくである。

この町の小間数は、『重宝録』に、

本湊町　延長弐百廿八間六尺
　　裏行十八間より三十間迄

本湊町久志木屋敷　同断籠有レ之候
　　但、久志本分廿八間半

と見える。久志本屋敷の名は『御府内沿革図書』延宝年中の形に、すでにその名の記載されているのを見る。

埋立地の生長先端に位置し、舟着きの便に富む当町は、早くから材木問屋や炭問屋が多く居所を占ることとなり紀州商人の栖原屋角兵衛店を初めとして大小の材木問屋や薪炭問屋が、文字どおり軒を並べて特色ある市街を形成していった。

寒さをもふせがんとてや鉄砲洲玉に
まろめる河岸のたどんや　雪　麿
十露盤の玉をはしらす鉄砲洲客をま
とにぞ売る熊野炭　　春　道
米相場あたりはづれの玉落に俵つみ
こむ鉄砲洲がし　　両　安
治れる世にはおそれず千石の船もむ
かふて来る鉄砲洲　　松　や
栖原とてかはをむきたる家作りはみ
かんの出る紀州店なり　鈴のや

などの狂歌が、この街の特色をよく捕捉しえていると思う。

○栖原屋角兵衛

本湊町に本居を構えた栖原屋角兵衛は、紀文・奈良茂の後を承けて、江戸材木問屋の代表的人物となった人物である。初代角兵衛は、紀州有田郡栖原村の人。百姓から漁業に転じ、次第に富を積んで、家をあげて上総国荻生港に本拠を移した。二代目角兵衛にいたり、元禄の初めに江戸鉄砲洲本湊町に材木屋の支店を開き、手船によって全国から材木を運び、江戸・大阪で売却した。

『武江年表』享保年中記事に

○栖原角兵衛といふ者、蝦夷より帆柱を多く切り出す。早く朽つる故久しからずして止む。（「大江戸春秋」に出づる。）

と見えている。栖原屋は四代茂勝にいたり、本拠を北海道に移して業務を拡張し、ついに函館の一大富豪となるにいたった。代々の主人角兵衛は、江戸に居住したことはないが、材木問屋の店は、元禄以降、明治初期まで、京橋区本湊町におかれていたのである。（『東京材木仲買史』二〇四頁）

○本湊町の諸問屋

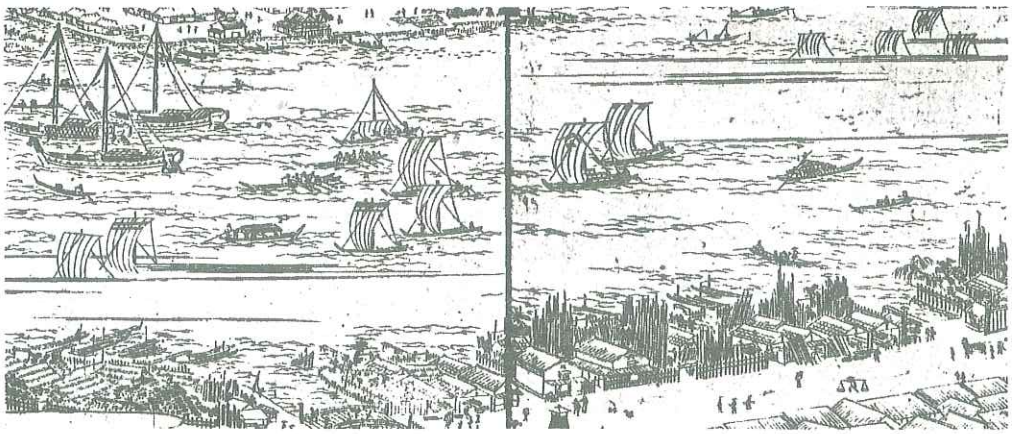
町誌資料として、『江戸十組問屋便覧』（文化一〇年版）から、本湊町の問屋を拾ってみると

干鰯〆粕魚油問屋
　本湊町　栖原屋久次郎
竹皮問屋　〃　いせや佐右衛門
鍋釜問屋　〃　針谷源右衛門
角屋十兵衛、松井屋六兵衛
絵具染草問屋
　本ミなと丁　清水屋儀兵衛
　　住吉屋作兵衛

以上のほか、麻布・下り傘・線香・醤油酢問屋などを手広く扱っていた、いせや幸右衛門の店が見出だせる。

ついでに、嘉永の諸問屋再興時における『諸問屋名前帳』から、本湊町所在の問屋を拾録しておいてみよう。

深川木場材木問屋
　家持　栖原屋角兵衛
（角兵衛紀州住宅三付、店支配人長七）
熊野炭大問屋　同　右



船松町（「江戸名所図会」より）

卯兵衛 地借 伊勢屋善右衛門
熊野炭小問屋 忠蔵 地借 丸屋源兵衛、忠蔵 地借
丸屋長左衛門、和兵衛 地借 熊野屋勘七、
弥兵衛 地借 久保田喜右衛門、卯兵衛 地借 丸屋
栄吉、佐助 地借 栖原屋角右衛門、右万 同居 徳
次郎、伝ヱ門 地借 尼屋利右衛門、伝吉 地借
丸屋伝次郎、清兵衛 地借 熊野屋太郎兵
衛、同山口屋惣兵衛
竹本炭薪問屋
川辺小網町一番組 山口屋源右衛門
同 川辺角二番組 大島屋三右衛門
久保田喜右衛門、尼屋利右衛門、
山路屋長兵衛、熊野屋勘吉、山田
屋嘉兵衛
同 川辺小網町一番組 和泉屋忠八
同 川辺丸二番組 川喜田屋与左衛門
川喜田屋貞之助、太田屋甚之助、
丸屋伝次郎、丸屋長右衛門、栖原
屋角右衛門、山口屋金七、丸屋栄
吉、伊勢屋善之助
炭薪問屋 川辺七番組 川辺六番組 地借 山口屋惣兵衛
同 治兵衛 地借 松屋新兵衛
炭薪仲買 七番組 家主 丸屋忠蔵、家主
八丈屋弥八、庄八 店 越後屋藤助、庄八 店
上総屋七兵衛、家主 丸屋清七、庄八 店
相模屋平右衛門、勘兵衛 衛店 伊勢屋藤兵
衛
廻船問屋四番組 治助 地借 伊勢屋貞之助
同 五番組 伝ヱ門 地借 伊藤屋 忠 八
同 六番組 安蔵 地借 長島屋嘉兵衛
十番組 喜兵衛 地借 大島屋三右ヱ門
太郎兵衛、伝次郎 地借 伊坂屋治兵衛、清兵衛 地借 山際屋
堀江屋甚之助 持 五人組 地借 山田屋儀兵衛、家持
地廻醤油問屋 宇兵衛 地借 河内屋佐助、
地廻塩問屋 安蔵 地借 丸屋太兵衛
地廻水油問屋 喜兵衛 衛店 伊勢屋栄助
家持 尼屋 利助、
地漉紙問屋 安蔵 地借 丸屋太兵衛
笥問屋 伝吉 地借 河野屋佐七
住吉組荒物問屋 家持 伊勢屋幸右衛門
伝吉 地借 川野屋佐七、吉兵衛 地借 松屋新兵衛
舂米屋 家主 河内屋卯兵衛、家主 伊勢
屋伝兵衛、家主 春屋小左衛門、鹿
島屋勘次郎、田畑屋重蔵、伊勢屋
幸右衛門、伊豆屋与兵衛
地掛蝋燭屋 一番組 家主 駿河屋吉兵衛
鋳物師 安蔵 店 忠右衛門

以上によって、本湊町には、紀州熊野の炭を扱う大問屋栖原屋角兵衛の店舗を初めとし、多くの炭問屋や廻船問屋があり、富有な町であったことがわかる。町内に鉄砲洲稲荷があるにもかかわらず神田明神の祭礼の山車行列に「三十三番、静舞人形」を参加させていたことからも、これは証せられるであろう。

従って、金融機関としての両替屋も銭両替だけでなく、金銀の両替を行う「三組両替」所属の両替屋があった。

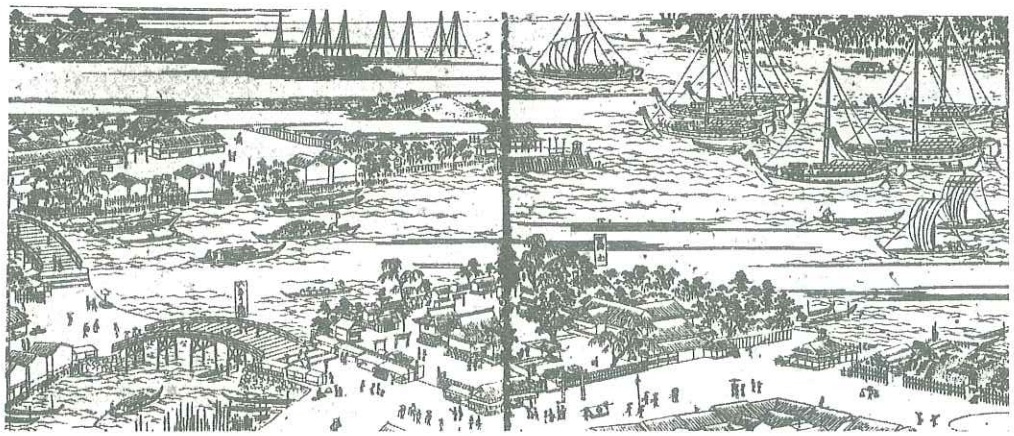
嘉永七年の『両替地名録』によると、この地区には、次の「三組両替」があった。

神田組
本湊町一丁目
酒 家持 伊勢屋太郎兵衛
船松町一丁目
酒 源蔵 地借 川井屋弥十郎
三田組
船松町二丁目
油・紙 家主 伊勢屋清兵衛
本湊町 家持 八丈島屋与市
世利組
南八丁堀五丁目
酒 仁三郎 地借 三河屋仁兵衛

○八丈島屋与市

嘉永の頃に、本湊町で両替屋を営んでいた「八丈島屋与市」の名は、また『江戸買物独案内』（文政七年刊本）巻二、「呉服太物類」取扱い店として

本八丈島織物類
八丈島出店
鉄砲洲船松町
八丈屋儀兵衛



湊稲荷社（「江戸名所図会」より）

御本丸　霊岸島東湊町
西御丸御用織物類　八丈島屋弥三郎
御本丸　鉄砲洲本湊町
西御丸御用織物類　八丈島屋与市

と記載された店で、御本丸・西御丸の御用を承り、本八丈島織物類を取扱っていた店だったことは、特筆に価するであろう。八丈島屋は、その家号が示すように、八丈島と密接な関係を持つ店だったのである。

八丈島屋与市は、八丈島三根村の高橋氏の出身者だった。近藤富蔵が編集した『八丈実記』第四編、島人系譜の中の、「高橋与野右衛門家の系譜」にこの人の略伝が載せてある。

八丈島高橋氏の遠い先祖のことはさて置いて、当家直接の先祖高橋長右衛門長次は、寛永十三年に伊豆国下田に移住して、八丈御船年寄を勤めた。その子長恒は、八丈島に渡海して三根村に永住の居を定めた。この人を初代として、二代恒栄、三代為栄、四代栄貞、五代常栄と家系を継ぎ、二艘の手船を持つ島でも屈指の家を築き上げた。

三代為栄の四男に与市がいた。享保八年十八才の時、江戸鉄砲洲本湊町に移って呉服商人となり、妻の縁故によって、柳営奥向に八丈島端物を納入するようになり、有福な商人になった。

八丈織の古商標
（末吉、長戸路武夫氏蔵）

大間知篤三氏著『八丈島民俗と社会』には『伊豆七島風土細覧』を引いて「伊豆七島には、八丈島に御船以外に江戸へ通ふ大船が四艘あり、うち二艘は地役人菊地一族の持ちもの、二艘は三根村高橋一党のものであった。」そして、三根村の高橋氏は、私船による航海を介して商業利潤によって栄えたと説いている。

同書の口絵に、末吉村の長戸路武夫氏蔵として、「八丈島屋与市」の店の商標が示してある。

与市は、文化の頃、二百両の官金を拝借して、郷里八丈島の八丈富士の山腹数町を開墾して、甘藷畑を開き窮民のために計るところがあった。

与市、名は閔慎、字は正卿、女護島と号し、また高橋華陽の名をもって数多の著作を遺した。で『国書総目録』に八丈島屋与市→高橋華陽、と標示し高橋華陽の項目下に、「医義或問」以下七二部におよぶ著作の目録を掲げている。その内「旧昔綜嶼噺話＜文政二刊＞は、八丈島に関する随筆のようである が、その他は固い経書に関する考説ばかりである。参考までに、刊本だけを抜出して示そう。

三墳＜寛政三刊＞、老子道徳経解＜寛政三刊＞、尚書証＜享和三刊＞、作易象図＜文化八刊＞、好学脳話＜文化一刊＞、改朔問考証＜文化一三刊＞

など、『八丈実記』には、その著作四〇部ほどを掲記した後に、

元来富有の人にて、江戸に於て一代に富家となり、かゝるおゝくの四角なる書を印刻せり。行状いたって正しく、妻（松村氏）また貞にして賢（にて良人いそがしき時は門弟に素読を教へしと云々）なりしと聞く。

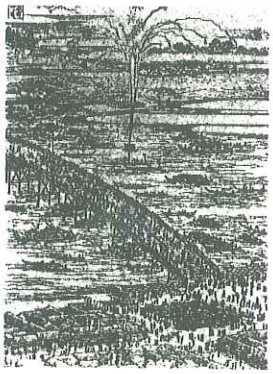
として文章を結んでいる。

○附、国立国会図書館所蔵の『諸家人名方角分』（昭和五二、三敏氏編　中野）に、鉄砲洲居住の聞人として、前記、高橋与市のほかに、

菊丸（二世寸、朱楽館）　木湊町　丸屋伝次郎
酒船（門屋号、排諧亭）　〃　井上（重辛）二良
北仙（北川）　北川次郎右衛門
龍涯（字其韋）　沼尻　収平

を記している。門屋の主人に、著名な狂歌師のいるのが洋目せられる。

◇ 東京を語る会　第33回

日時　七月二十五日（土）
　　午後二時～三時三十分
演題　花火の歴史と両国川開き
講師　南坊　平造氏
　　（火薬歴史研究家）

今年も八月一日に隅田川の花火が開催されますが両国の花火・納涼は江戸時代からの夏の風物詩の一つでした。お話の後で当館所蔵の16ミリ映画「日本の花火」を上映します。